R100 古紙パルプ配合率100％再生紙を使用

自由で伸びやか 伊藤長七の教育

出身地諏訪で初 寒水会がフォーラム

伊藤長七がつづった「小諸を去る辞」を詩吟で披露する諏訪岳風会のメンバー

諏訪市四賀出身の教育者、伊藤長七（1877～1930年）を研究する「諏訪寒水会」は6日、「伊藤長七フォーラムin諏訪」を同市の諏訪教育会館で開いた。県内外から約140人が来場。長七をテーマにした講談や詩吟、講演会などを行い、子どもの自発的活動を重視した自由で伸びやかな「大正自由主義教育」を実践した長七の歩みを知る機会にした。

伊藤長七フォーラムは3回目。諏訪寒水会発足5周年記念として諏訪では初めて開いた。講演会では長七が初代校長を務めた小石川中等教育学校（当時は東京府立第五中学校）の元校長、栗原卯田子さんが「子どもたちの未来と学びの創造～伊藤長七の思想と学校づくり」と題し、長七の教育思想について同校の中高一貫校化の経過を重ねて説明した。

「知らない学問に触れ、本当に好きなことを見つけることができた」などとする、長七が校長を務めた当時の生徒の声を紹介。「立志・開拓・創作」の建学の精神を土台にした現在の教育について、日本に閉じこもらず海外を目指す国際理解教育、自分から深く学ぶ教育などを実践するには6年間の一貫教育が必要―と語った。

長七の孫である伊藤ひろ子さんも講師として参加。太平洋戦争中、東京・駒込の伊藤家に保管された長七の膨大な資料を守るため、1945（昭和20）年に伊藤家は資料と共に富士見高原に疎開したと話した。同年3月の東京大空襲直前だったという。

講談師の田辺鶴遊さんは「伊藤長七物語」と題して自ら取材して構成した講談を披露。長七の教え子の一人、木村岳風を祖宗範とする諏訪岳風会は、長七が東京高等師範学校に進むため小諸高等小学校の教師を辞める際につづった「小諸を去る辞」などを詩吟で発表した。諏訪寒水会の河西敏夫副会長は長七の代表的な著書「現代教育観」の内容を紹介した。

同会の渡邉文雄会長は「教育への情熱は半端ではなかった長七の人間的な魅力を知る場になれば」と話した。

（小尾口有二）